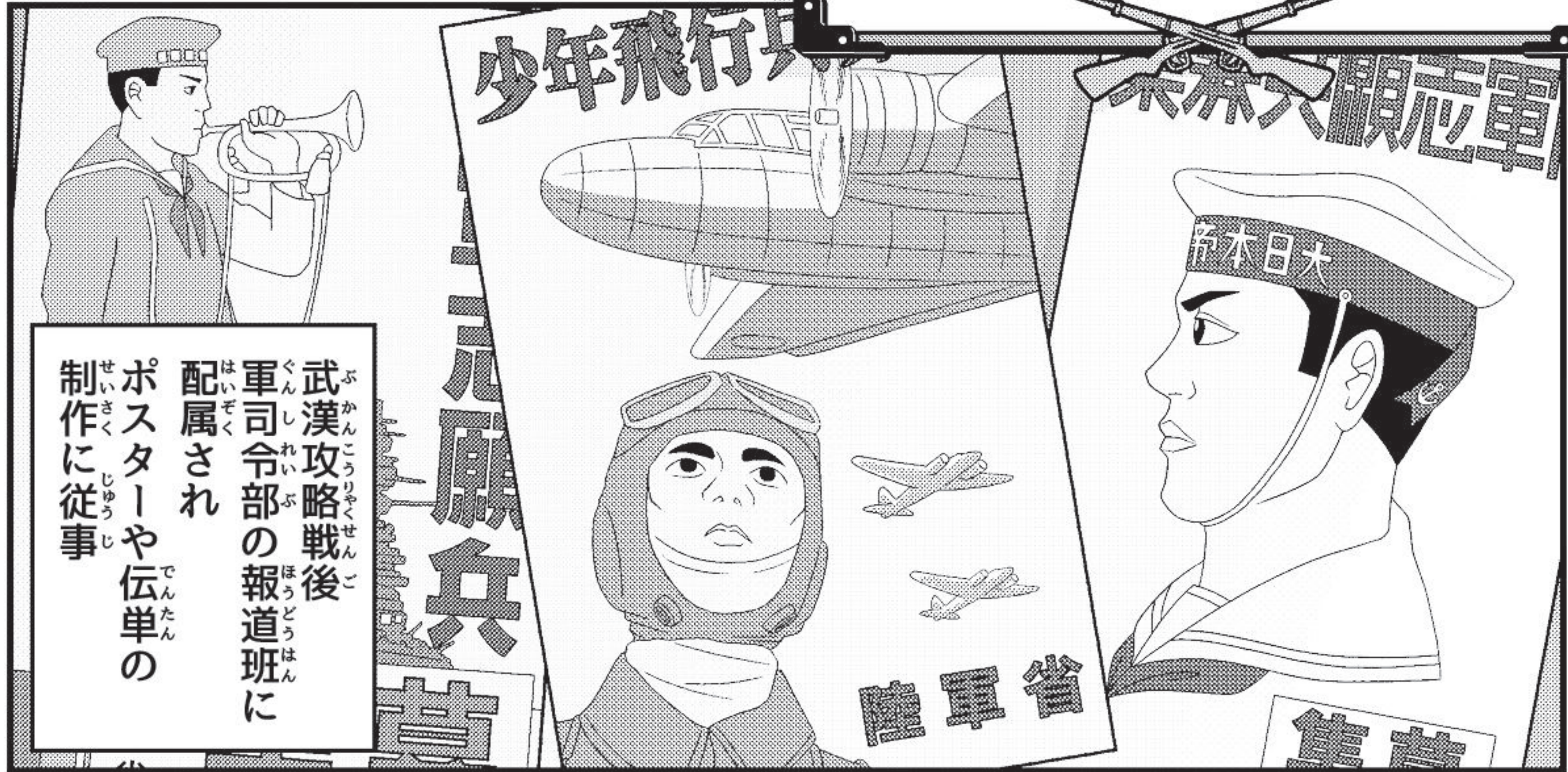
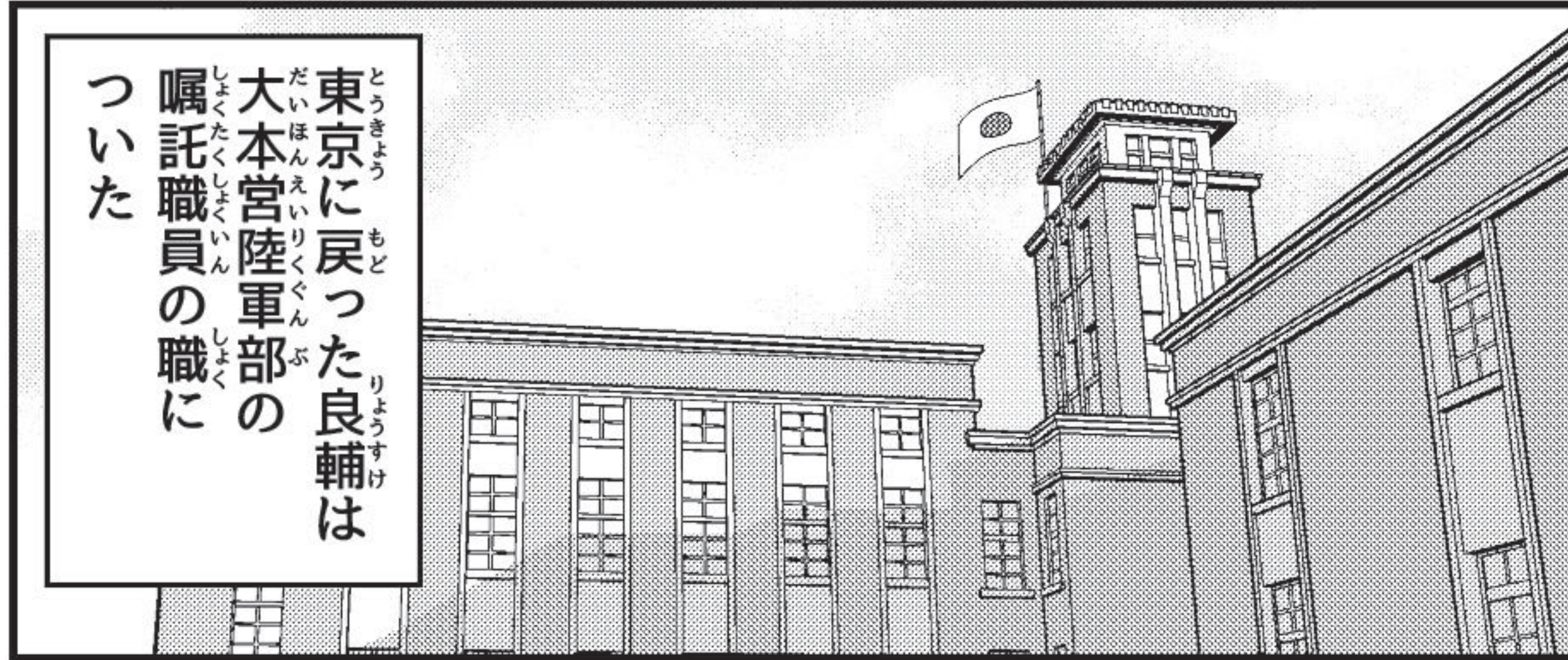


だい しょう ぐんたい じだい  
【第4章 軍隊時代②】



※伝単…戦時において敵国の民間人・兵士をくじけさせるために配る印刷物。



とうきょう もと  
東京に戻った良輔は  
だいほんえいりくぐんぶ  
大本営陸軍部の  
しよくだくしさいん  
嘱託職員の職に  
ついた

しょうわ ねん  
昭和15年に  
しょうしゅうかいじよ  
召集解除となり

昭和15年(1940年)



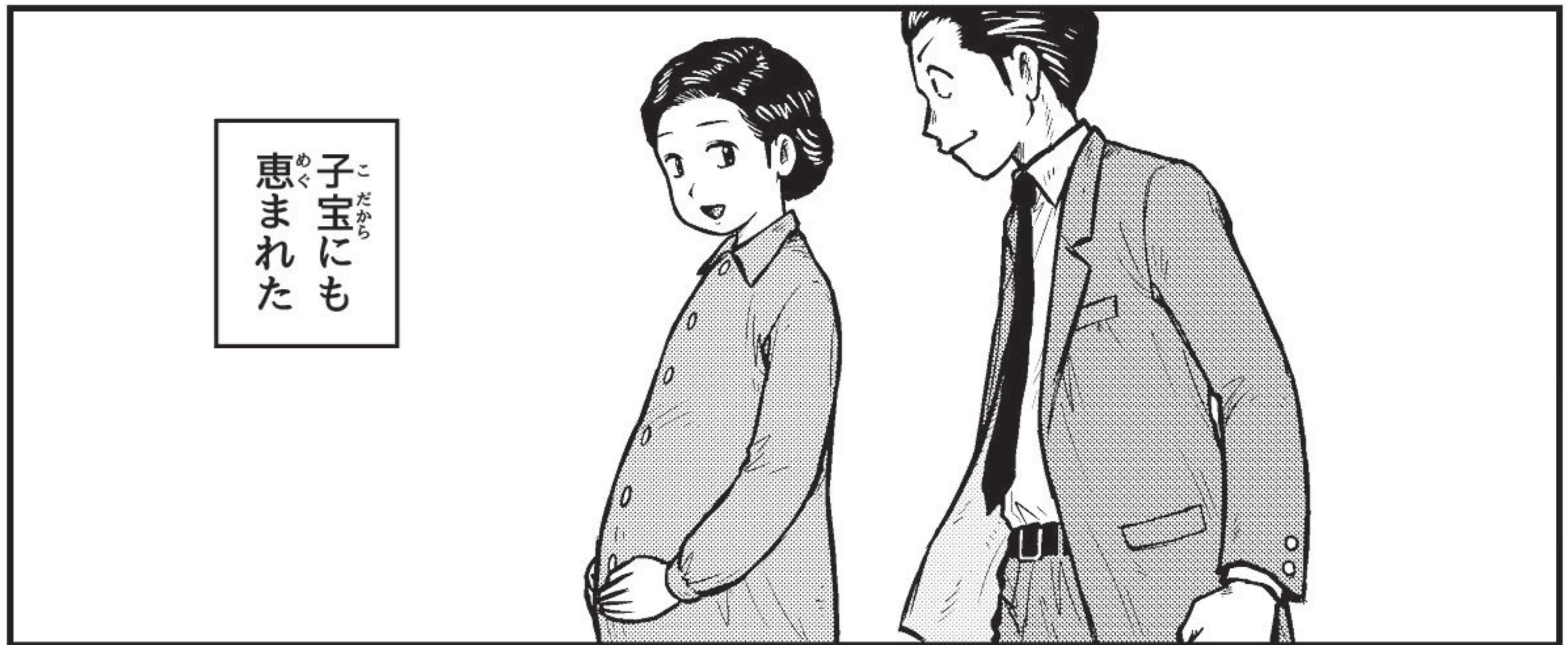
その年の2月  
仕事先で出会った  
5才年下の  
美代と結婚

な すりょうすけ さい  
那須良輔(26才)

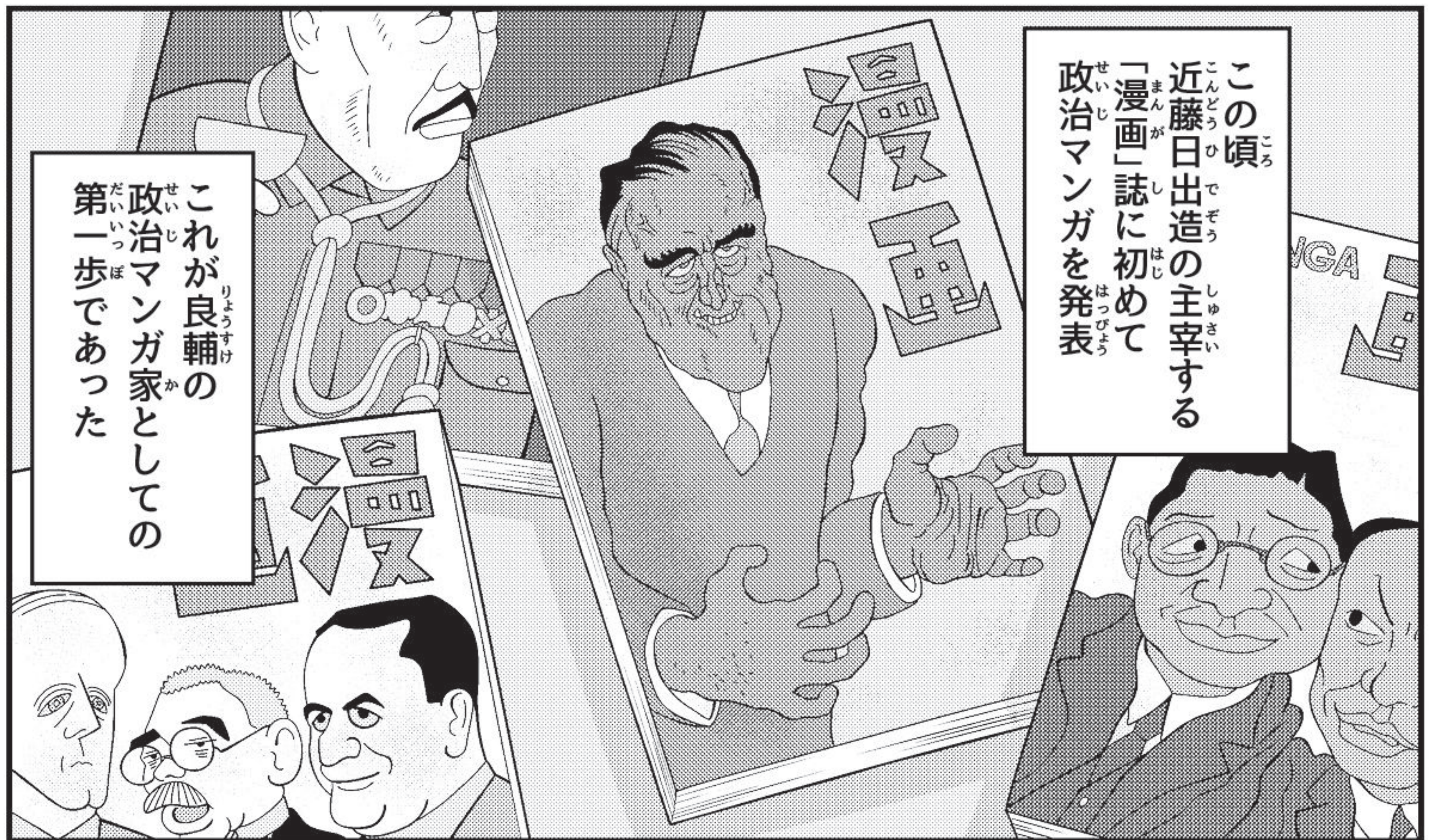
りょうすけ つま  
良輔の妻  
みよ  
美代

琴瑟相和



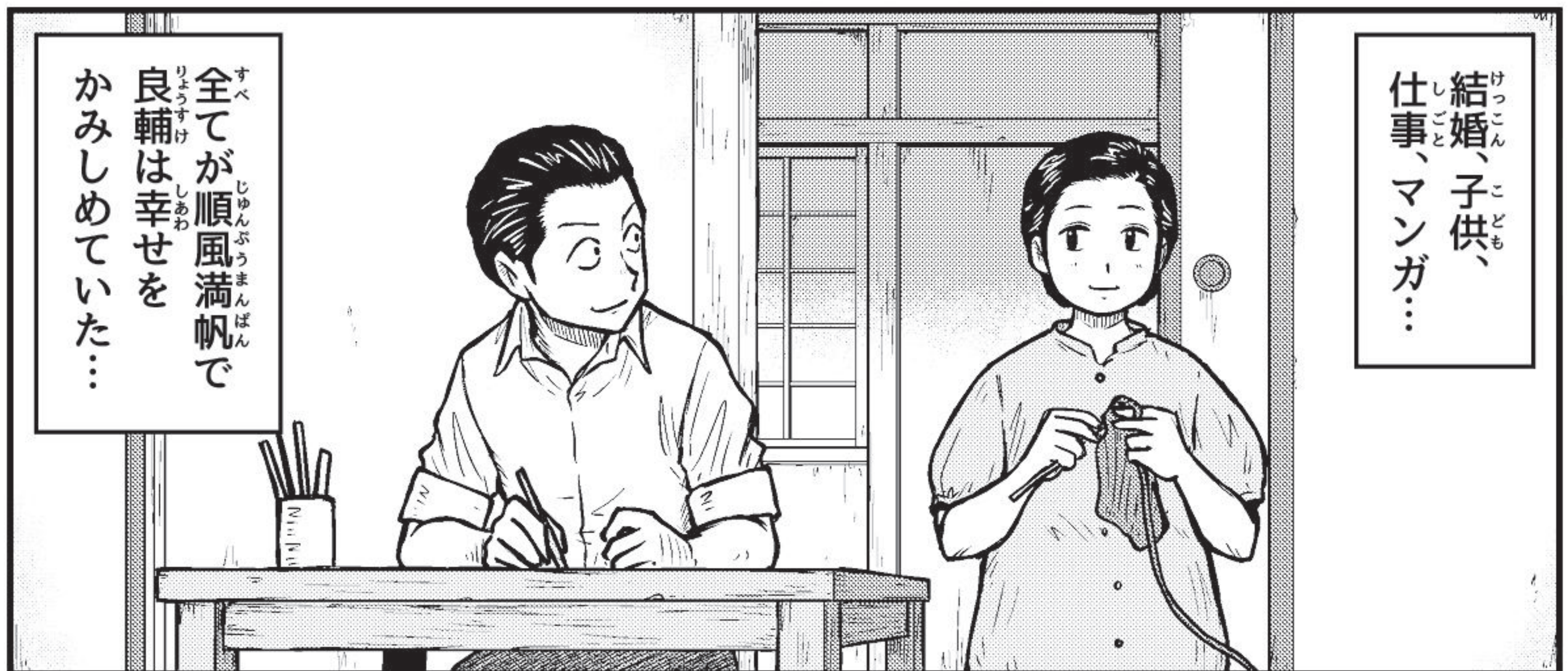


こだから  
子宝にも  
めく  
恵まれた



この頃  
近藤日出造の主宰する  
「漫画」誌に初めて  
政治マンガを発表

これが良輔の  
政治マンガ家としての  
第一歩であった



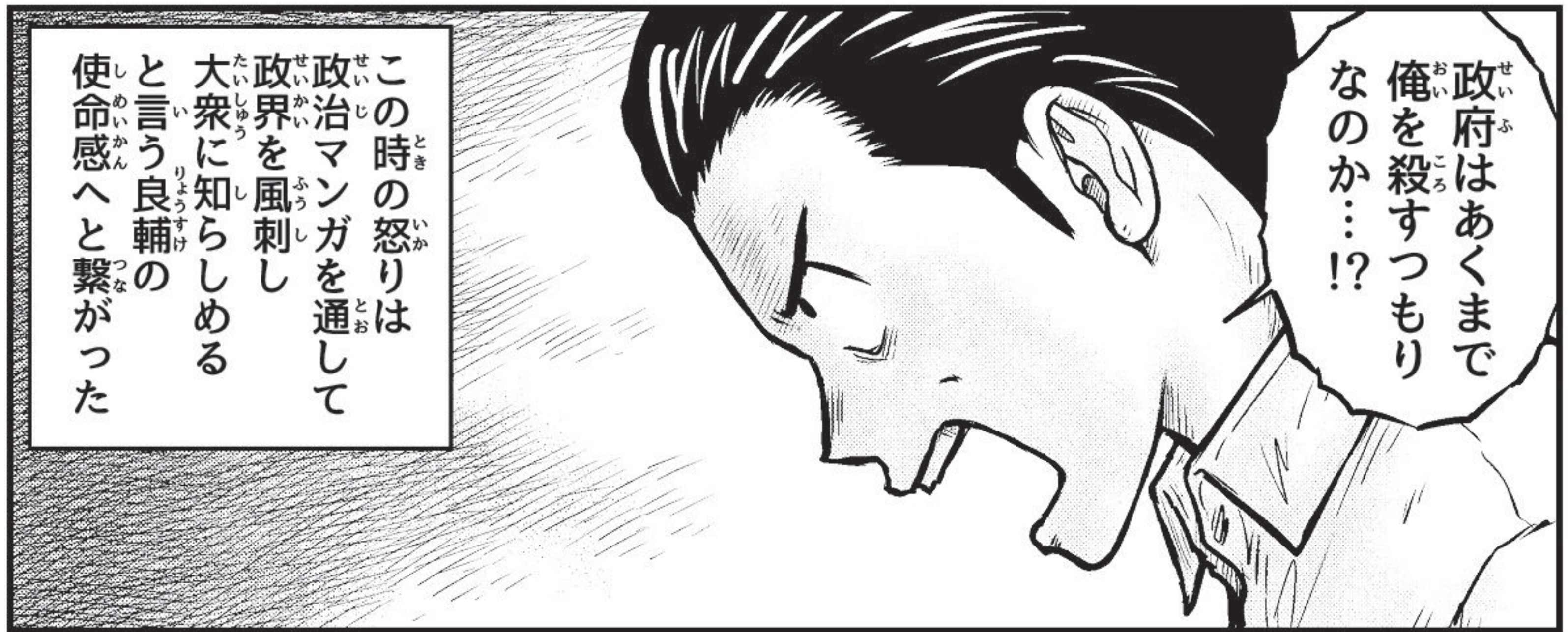
すべてが順風満帆で  
良輔は幸せを  
かみしめていた…

結婚、子供、  
仕事、マンガ…



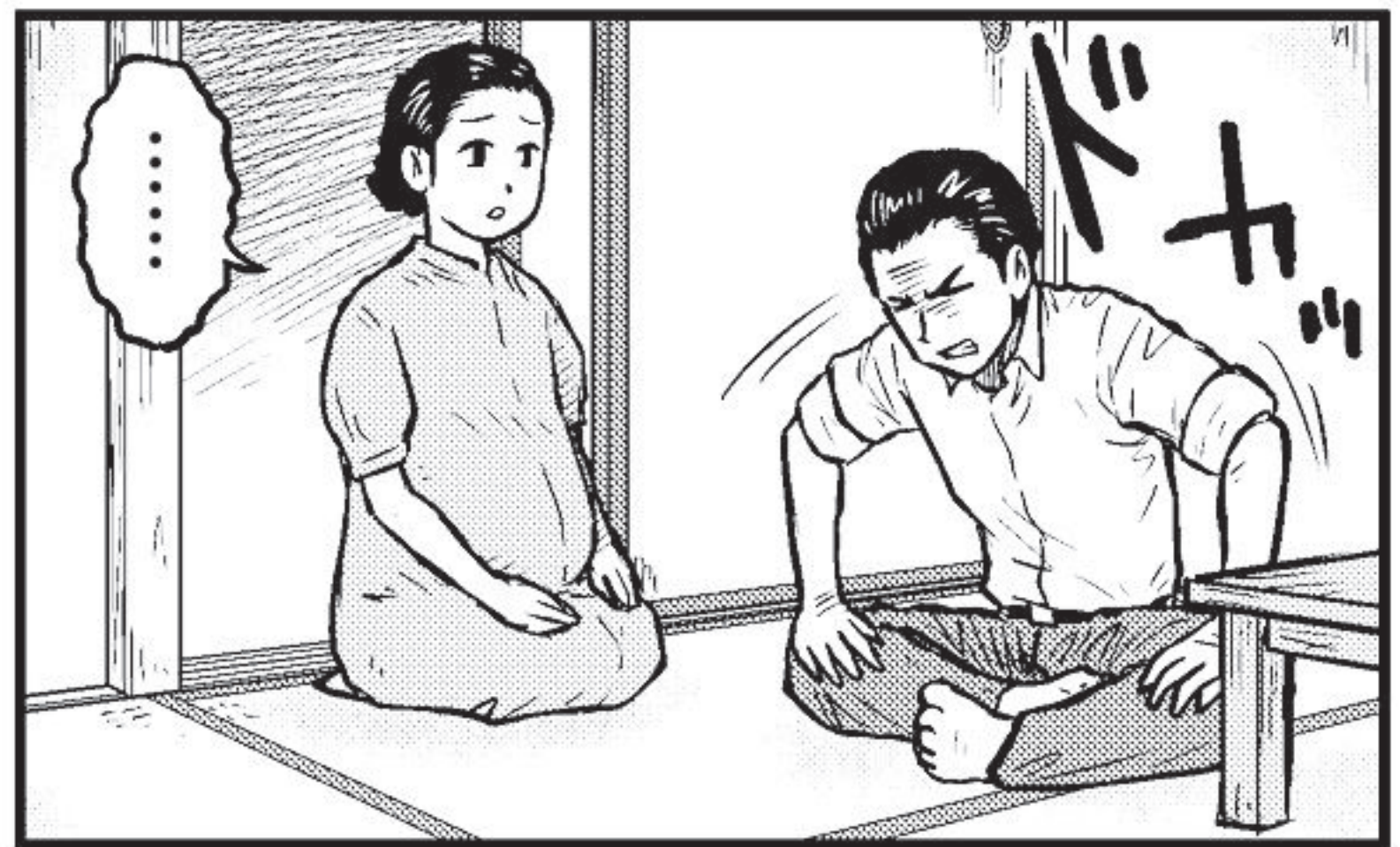
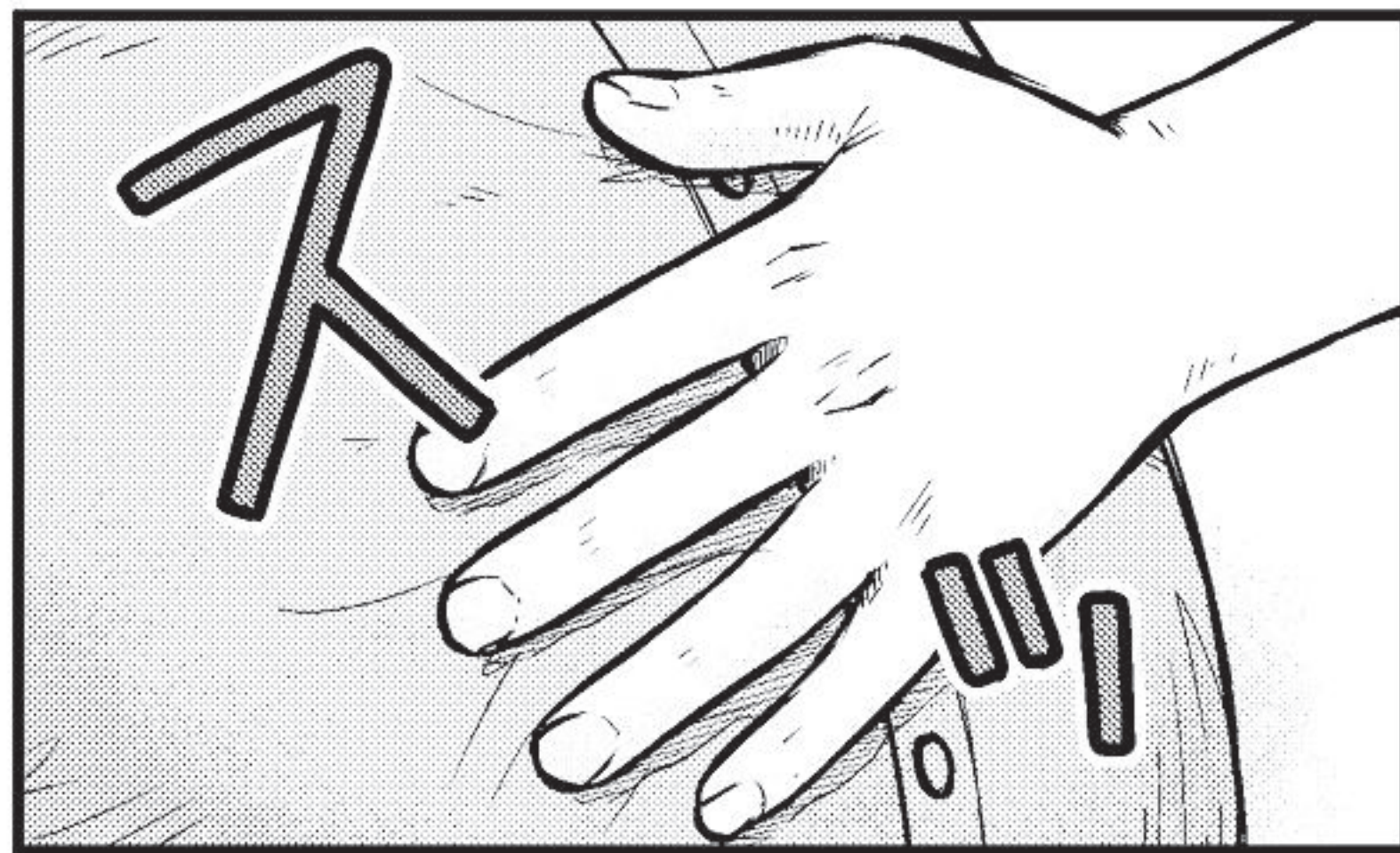






政府はあくまで  
俺を殺すつもり  
なのか：!?

この時の怒りは  
政治マンガを通して  
政界を風刺し  
大衆に知らしめる  
と言う良輔の  
使命感へと繋がった

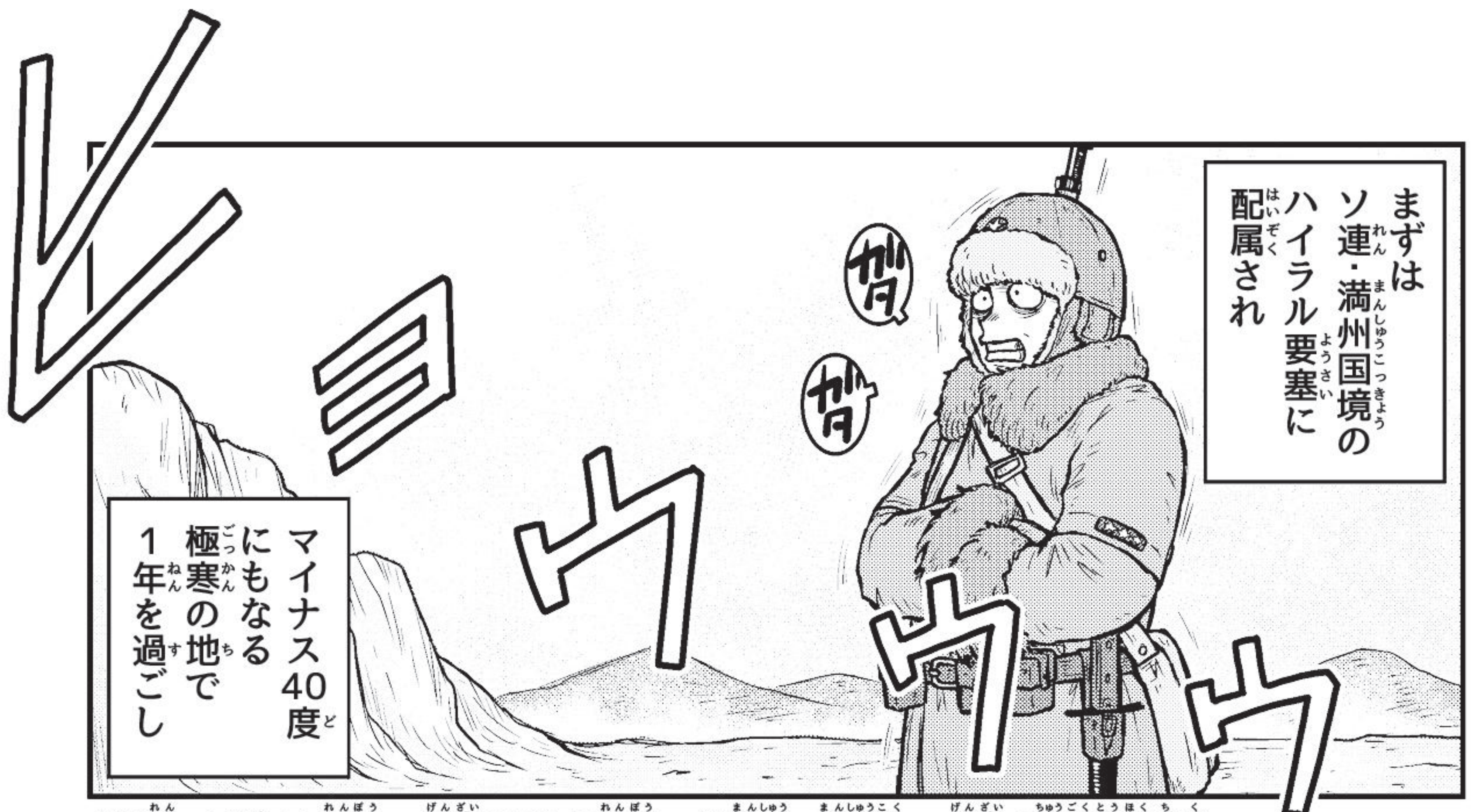


俺は絶対に  
死なん：!!

この子のために  
石にかじりついてでも  
生きのびてみせる!!

良輔は  
生まれてくる  
子供の名前を  
男女両方書き残し  
三たび戦場へと  
向かった：





まずは  
ソ連・満州国境の  
ハイラル要塞に  
配属され

マイナス40度  
にもなる  
極寒の地で  
1年を過ごし

※ソ連…ソビエト連邦。現在のロシア連邦。 ※満州…満州国。現在の中国東北地区。



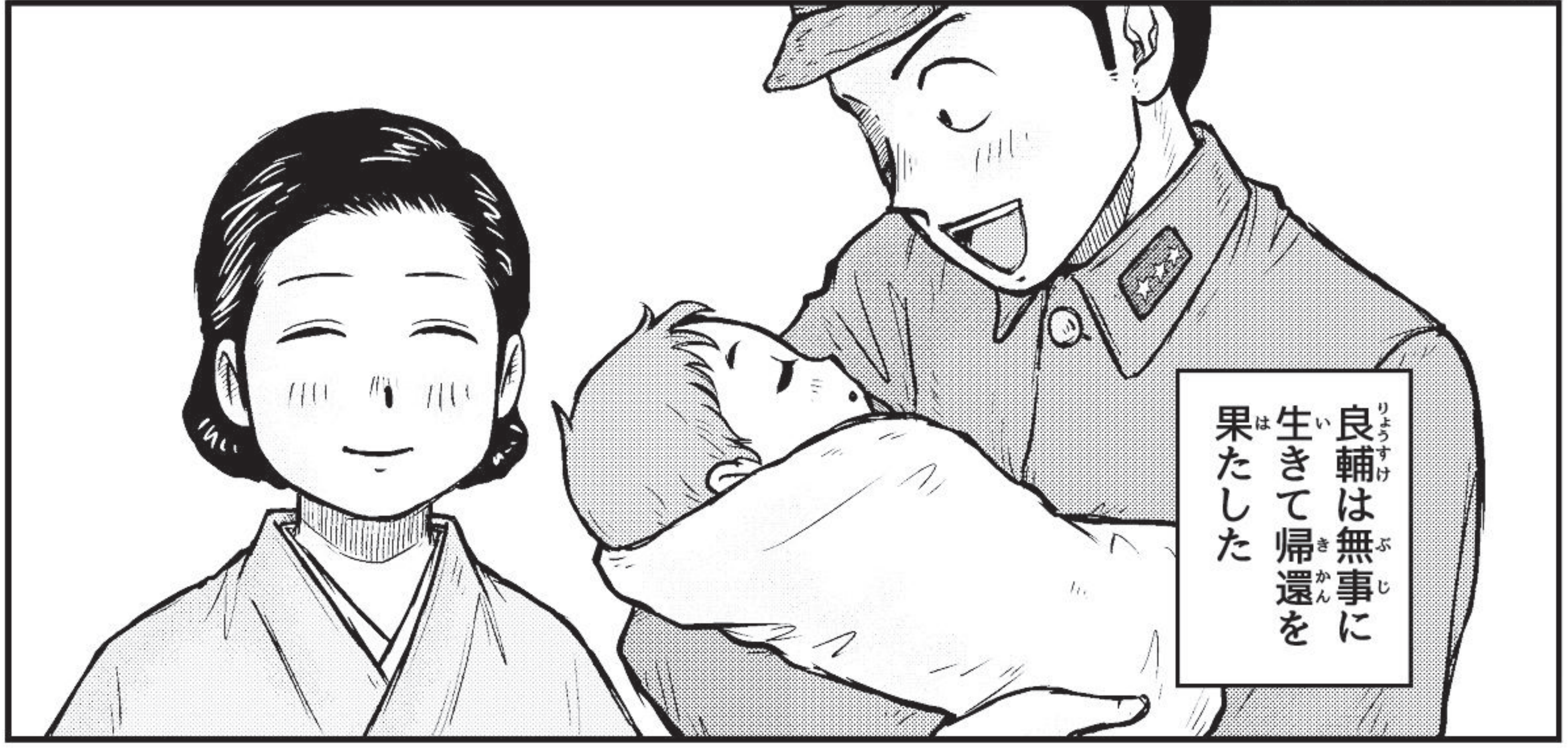
次に新京の  
関東軍司令部に  
転属され

報道部で  
対ソ連の伝単と  
ポスターの制作に  
従事した

そして昭和18年  
召集解除

昭和18年(1943年)

※新京…満州国の首都。



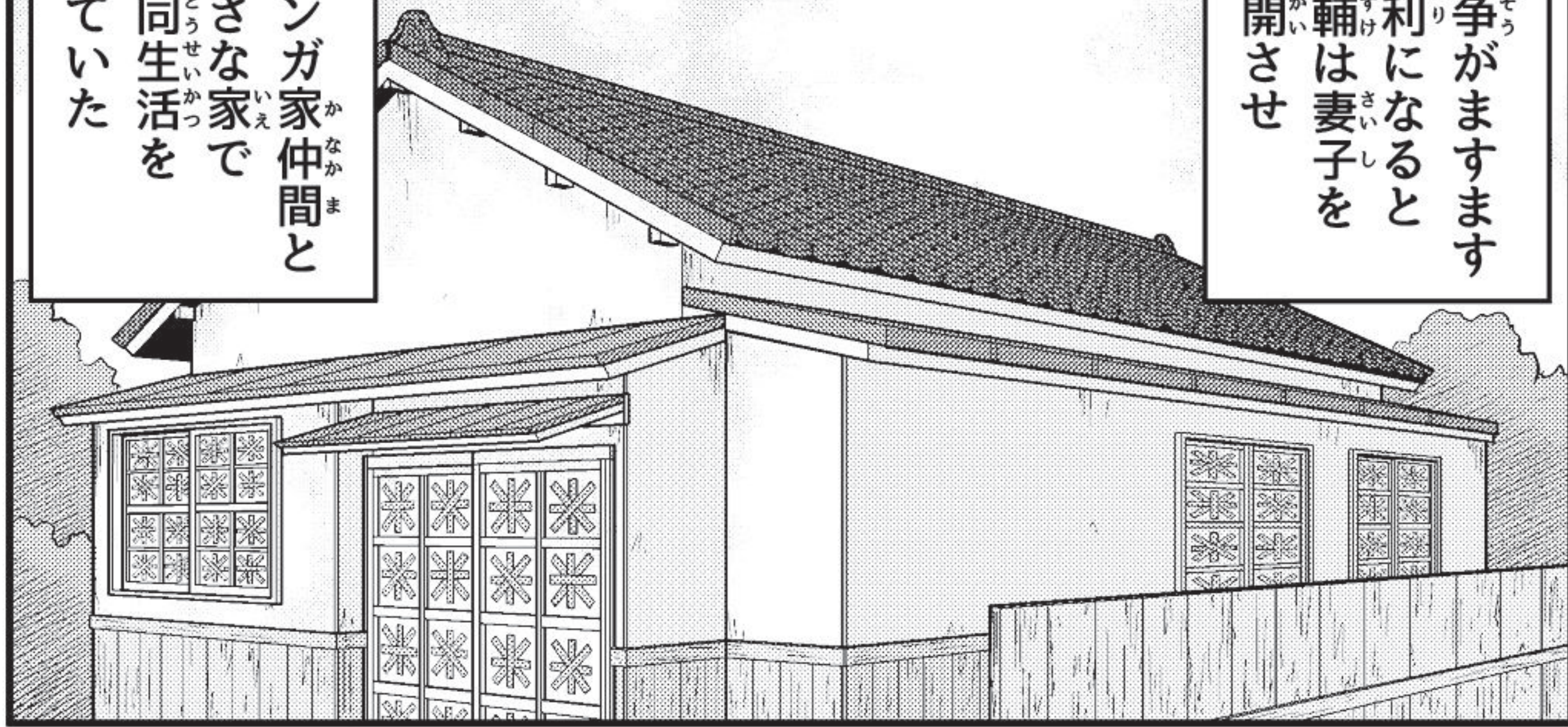
良輔は無事に  
生きて帰還を  
果たした



昭和19年

戦争がますます不利になると  
良輔は妻子を疎開させ

マンガ家仲間と小さな家で共同生活をしていた



昭和19年(1944年)

そのマンガ家仲間は  
近藤日出造、横山隆一、  
横井福次郎、和田義三で



那須良輔



横井福次郎



近藤日出造

良輔を加えた同居人5名が後の「漫画集団」の設立に深く関わっていた

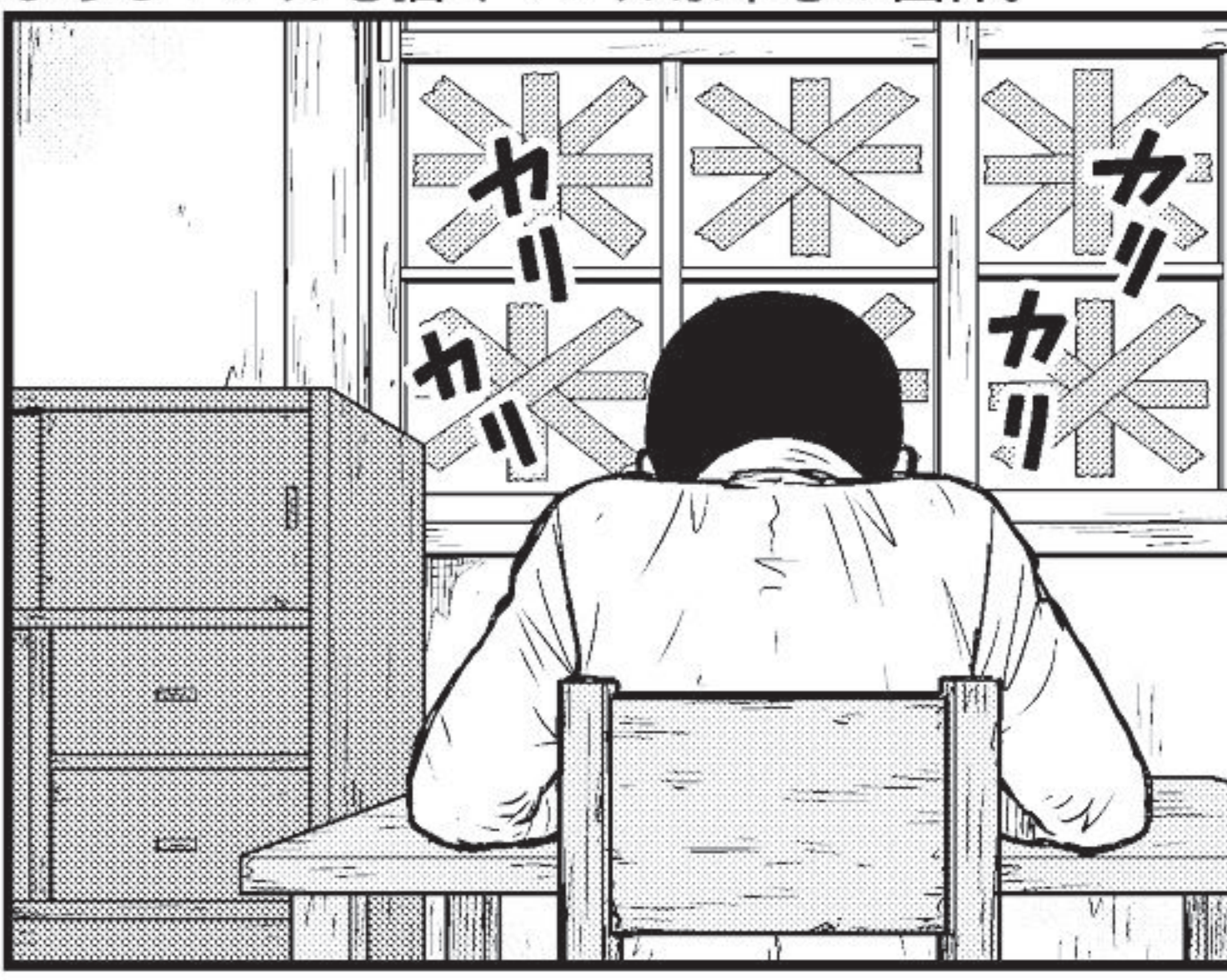


和田義三



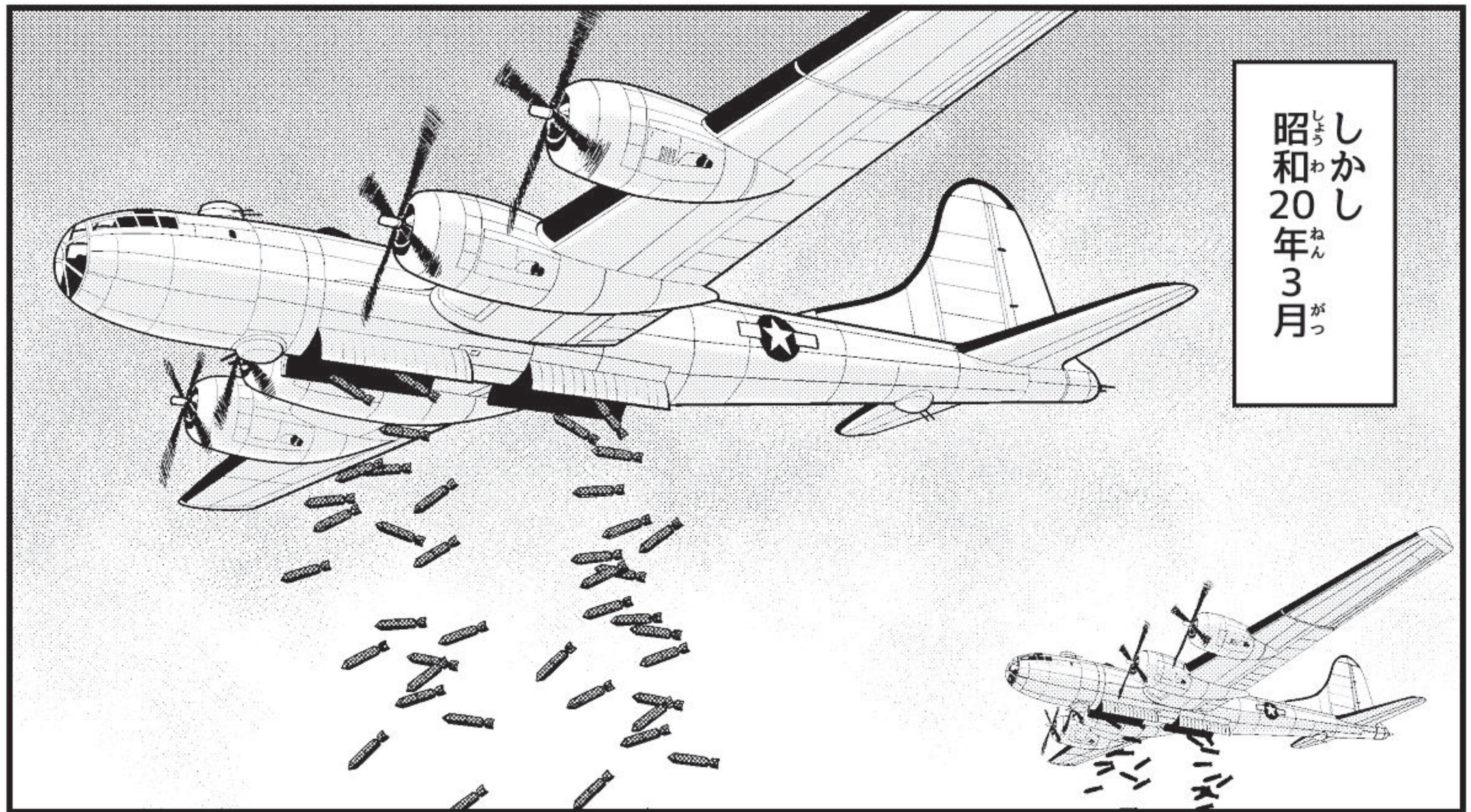
横山隆一

※漫画集団…大人も楽しめるマンガを描くマンガ家中心の団体。



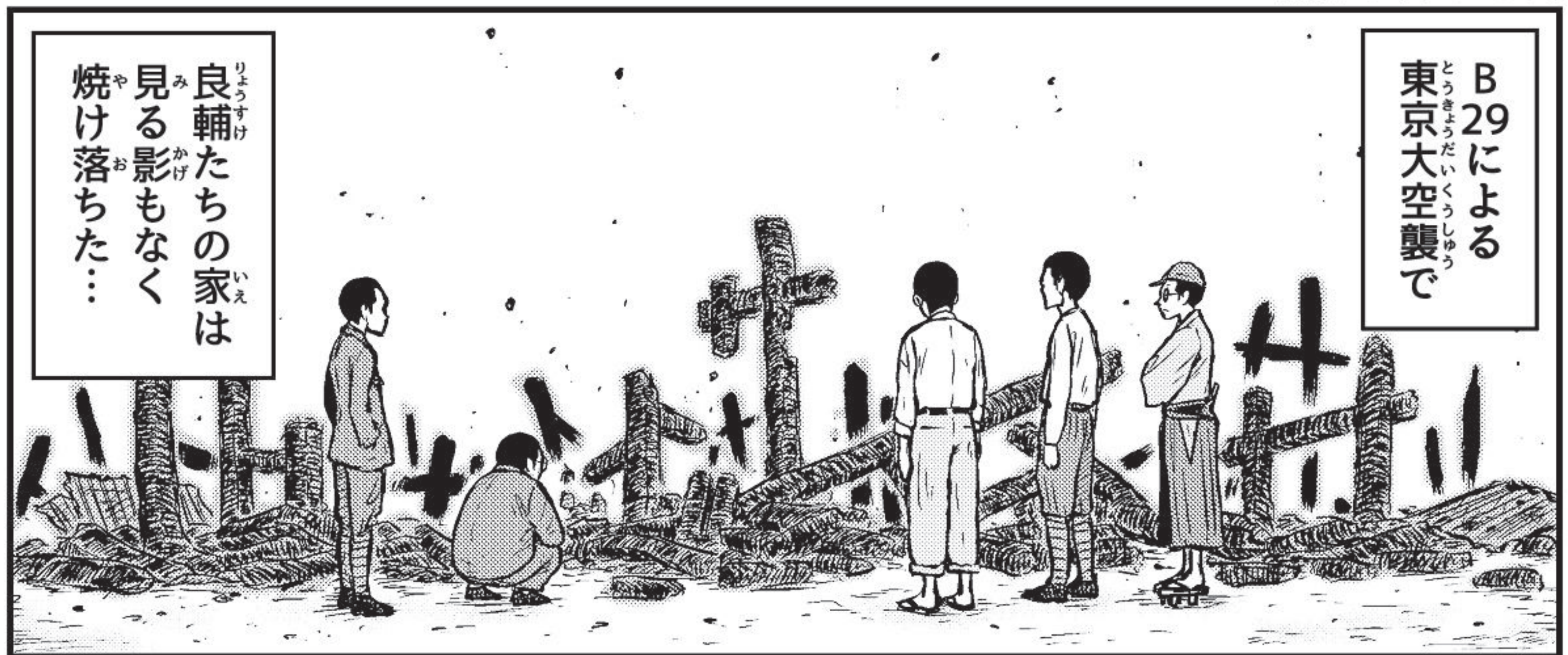
戦時下の厳しい統制のもとメンバーたちは切磋琢磨してマンガを描いていた





しかし  
昭和20年3月

昭和20年(1945年)



良輔たちの家は  
見る影もなく  
焼け落ちた！

B29による  
東京大空襲で

※B29…アメリカ軍の大型爆撃機。

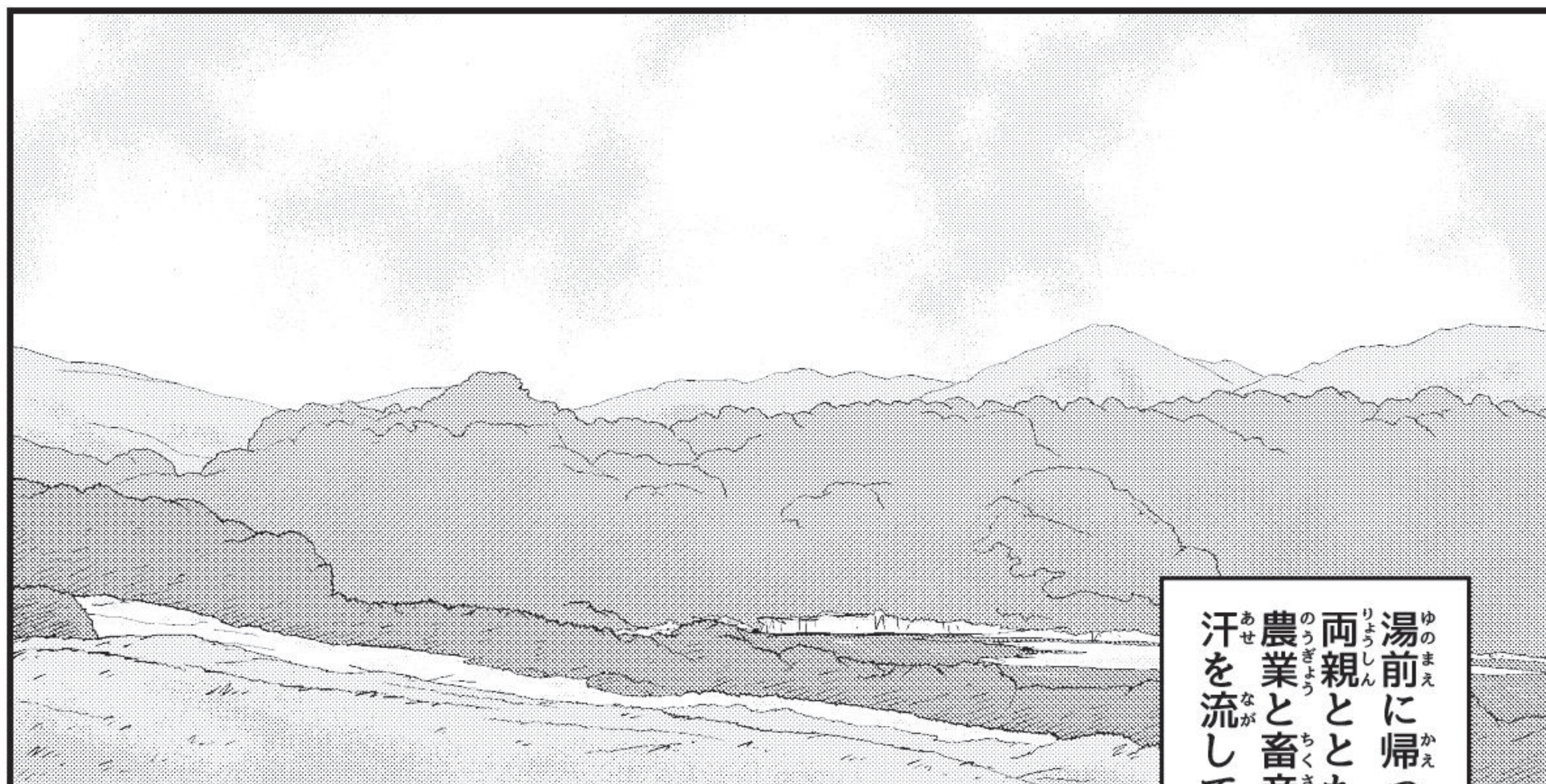


おう！

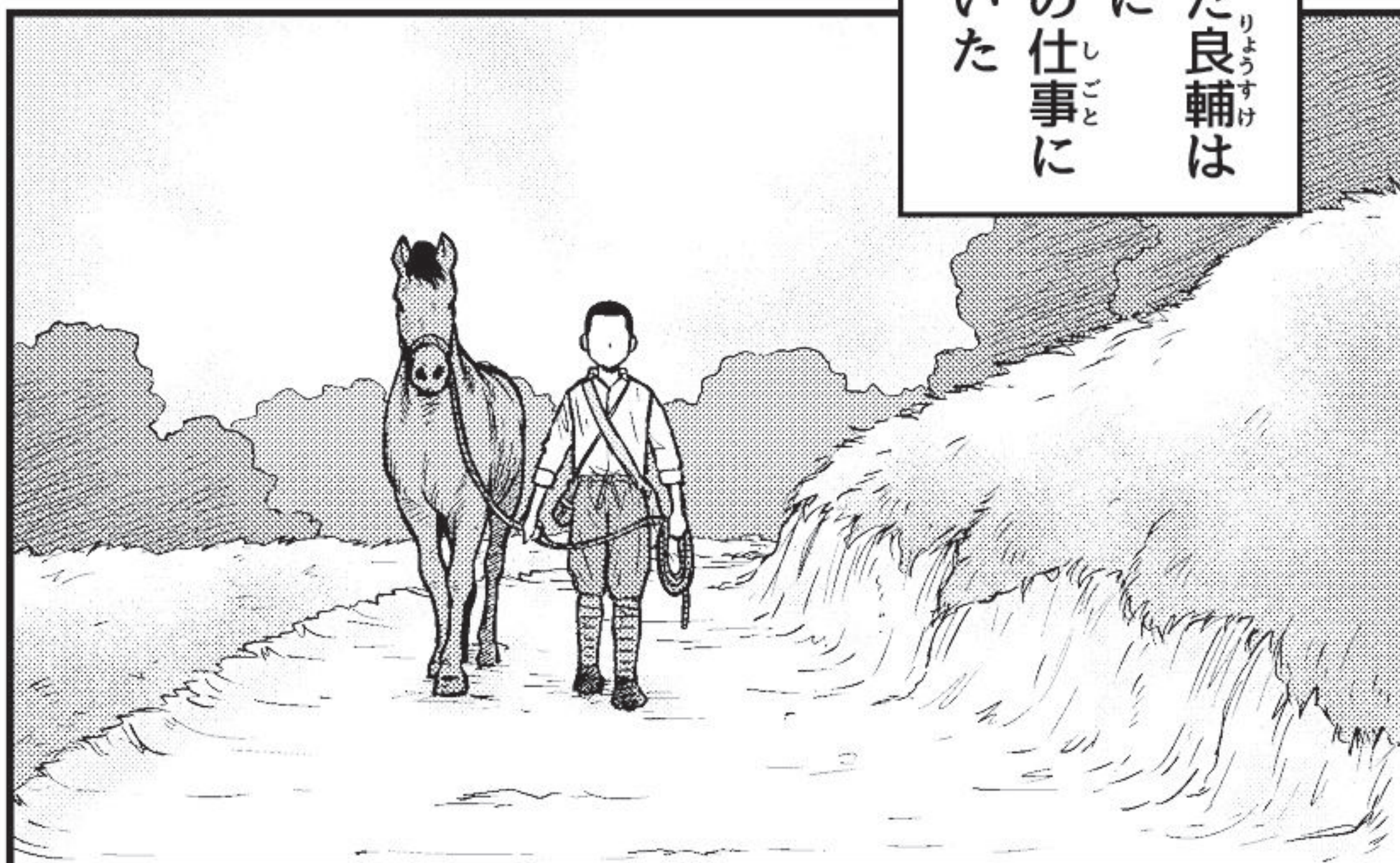
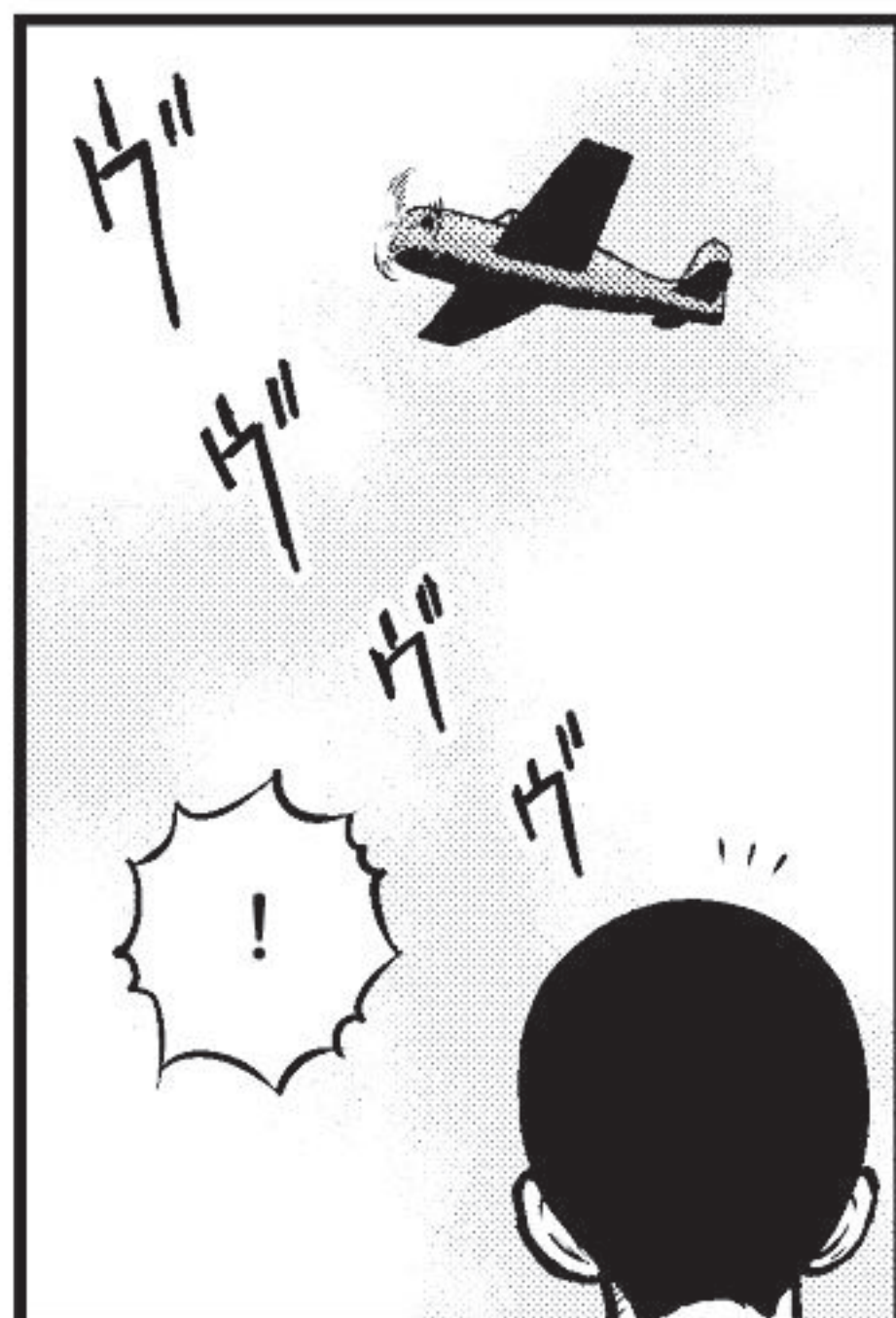
またいつか  
みんなで再会  
しよう！

幸いにも  
全員無事だったが  
家を失った良輔は  
郷里へ帰るしか  
なかった





湯前ゆのまえに帰かえった良輔りょうすけは  
 両親りょうしんととももに  
 農業のうぎようと畜産ちくさんの仕し事ごとに  
 汗あせを流ながしていた



軍ぐんの報ほう道どう部ぶや  
 大本だいほん営えい陸りく軍ぐん部ぶで  
 多おほくの情じょう報ほうに  
 触ふれてきた良輔りょうすけは  
 いち早はやく日に本ほんの敗はい戦せんを  
 予よ想そうしていた



グラマン…  
 敵てき機きが  
 こんなにも  
 堂々どうどうと…

こりやあ日本にほんも  
 長ながくないな…

※グラマン…アメリカ軍ぐんの艦載機かんさいき。(軍艦ぐんかんに搭載とうさいする航空機こうくうき)



そして昭和20年8月15日  
村人総出で防空壕を  
掘っている最中

役場の助役から  
日本敗戦の一報が  
届けられた

ま…  
ま…  
負けた…



昭和20年(1945年)



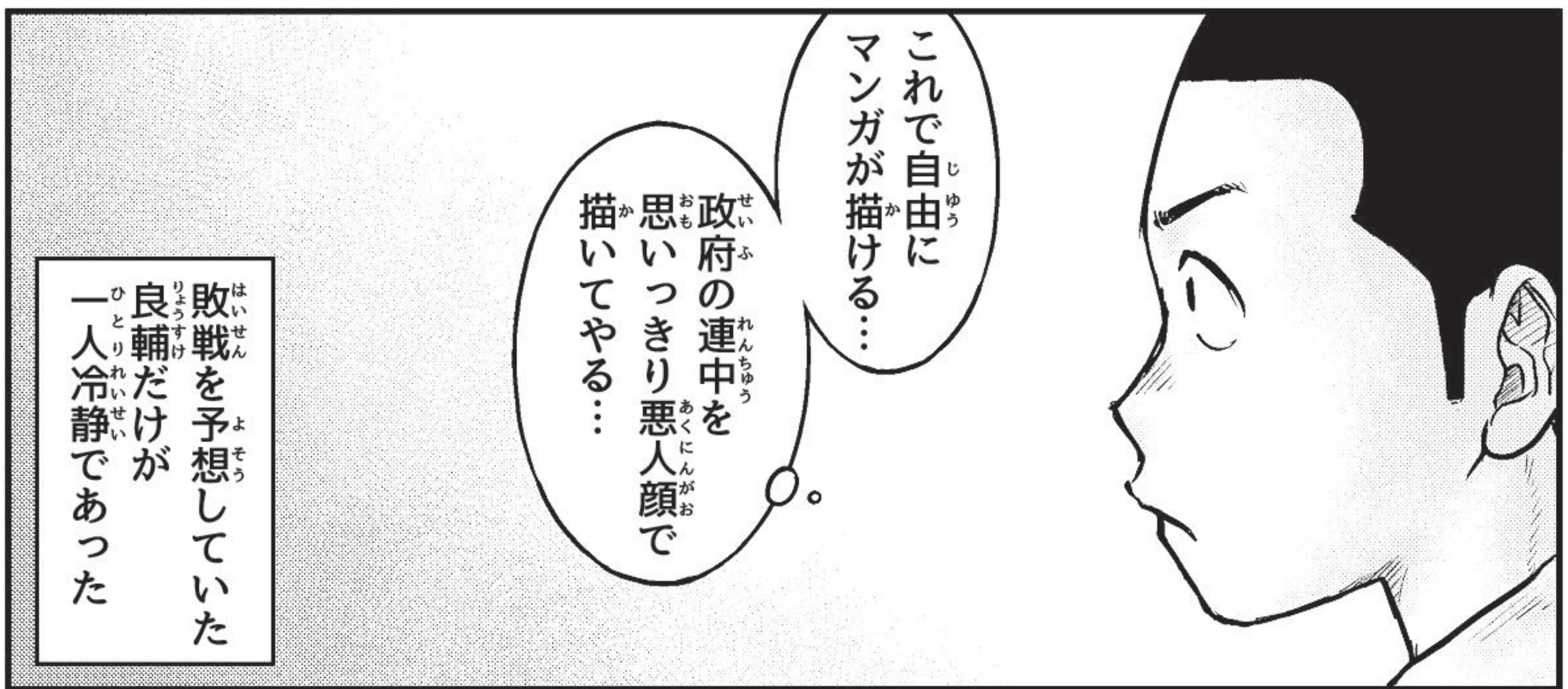
※玉音放送…終戦を告げる昭和天皇朗読のラジオ放送。昭和20年(1945年)8月15日正午に放送された。







日本の勝利を  
信じていた村人達が  
怒り、泣き叫ぶ中...



これで自由に  
マンガが描ける...

政府の連中を  
思いっきり悪人顔で  
描いてやる...

敗戦を予想していた  
良輔だけが  
一人冷静であった



昭和21年

マンガに  
専念できると  
期待していた  
良輔であったが  
そもそもマンガの  
仕事がなく



家業を  
手伝いながら  
魚釣りや鰻とり  
などをして  
過ごしていた

そんな生活が  
丸一年続き

ポーン

良輔からマンガの  
情熱が消えかろう  
としていたある日

那須良輔(33才)

下町橋

④下町橋：明治39年(1906年)竣工の都川に架かる橋。町指定文化財。

昭和21年(1946年)



え？

子供向けの  
連載マンガ？

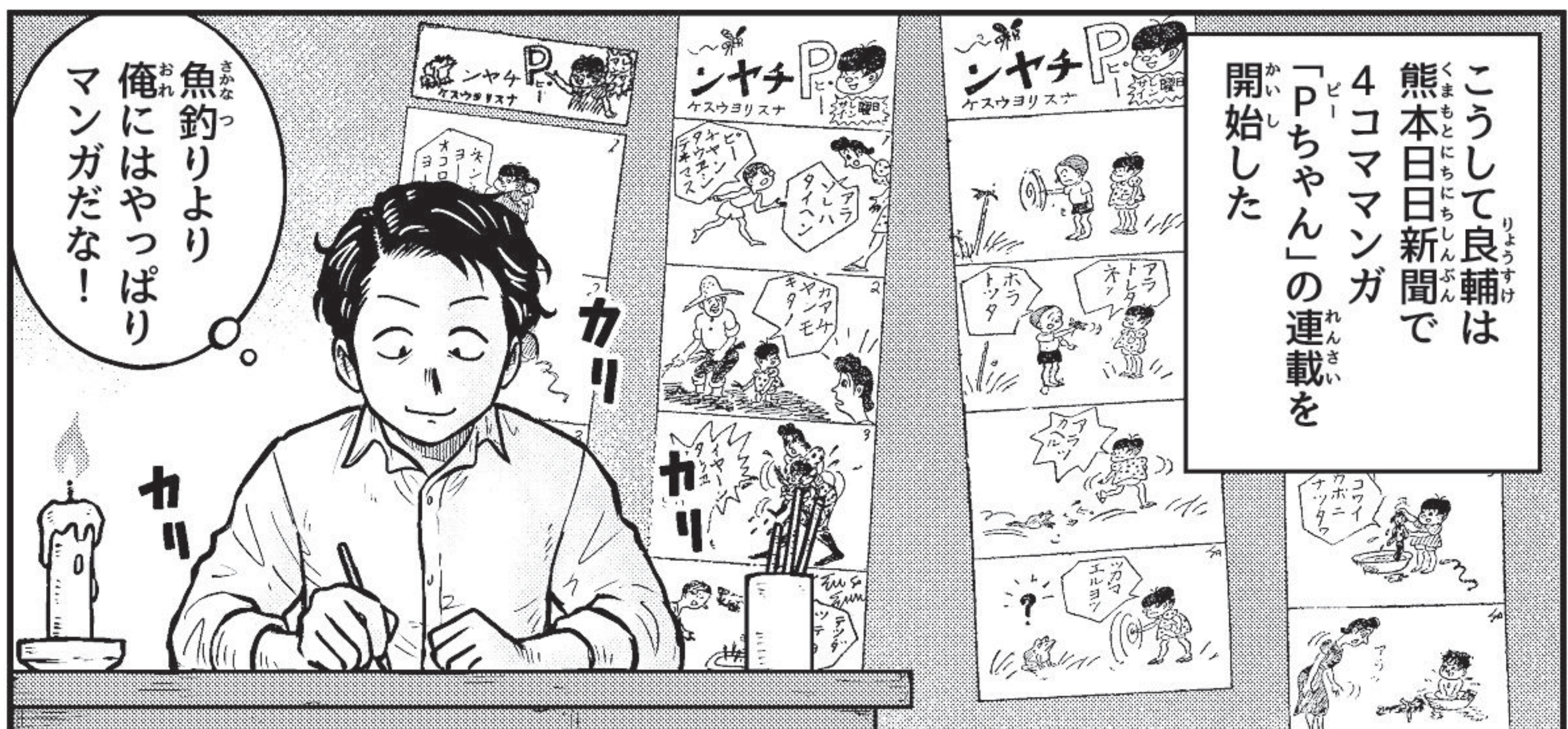


熊本日日新聞の  
牧田と言う人物が  
良輔を訪ねて来た





※タブロイド紙…通常サイズの半分ほどの小型新聞。



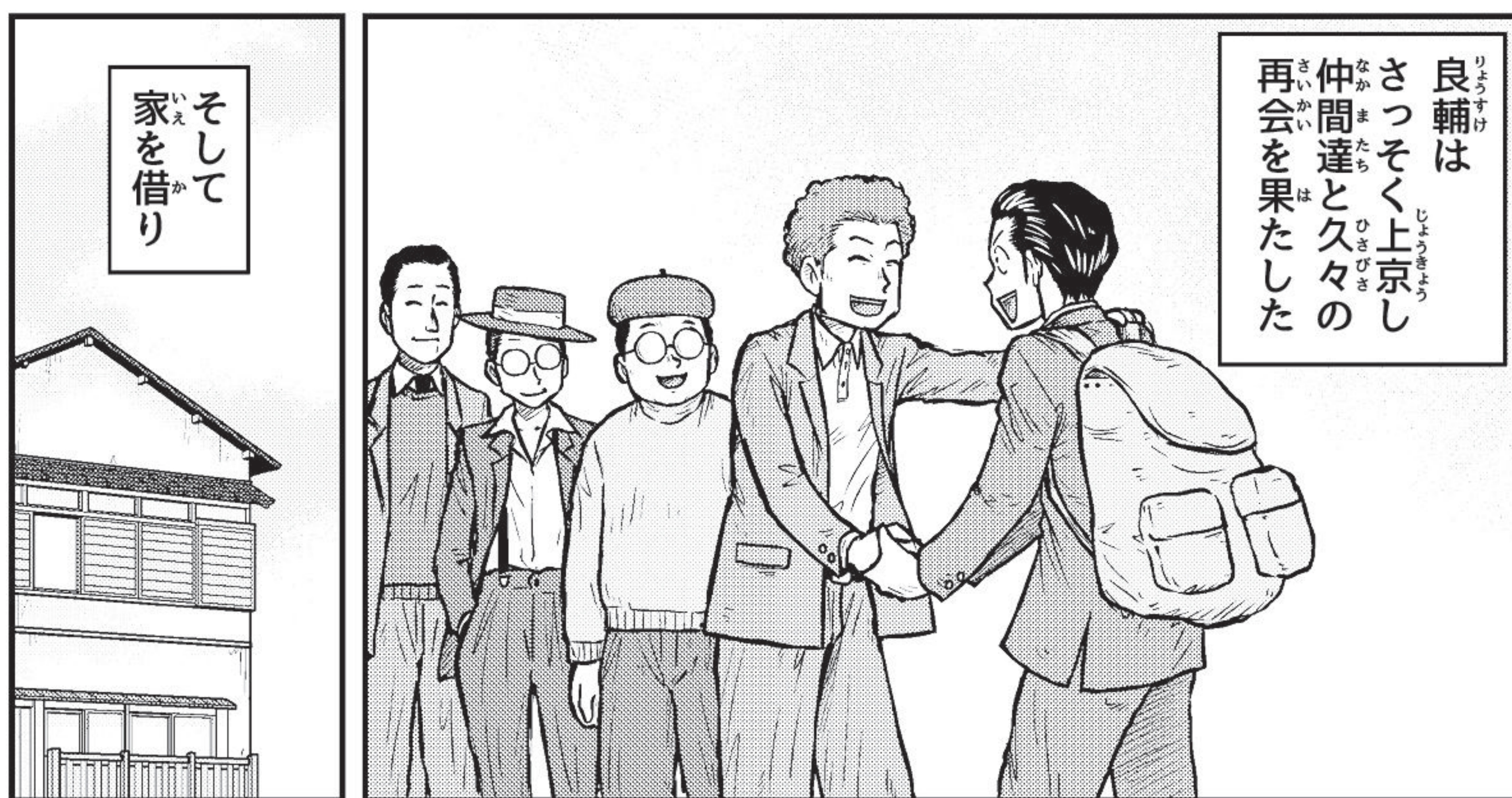


㊦ ヒノキ…湯前町の木に指定されている。



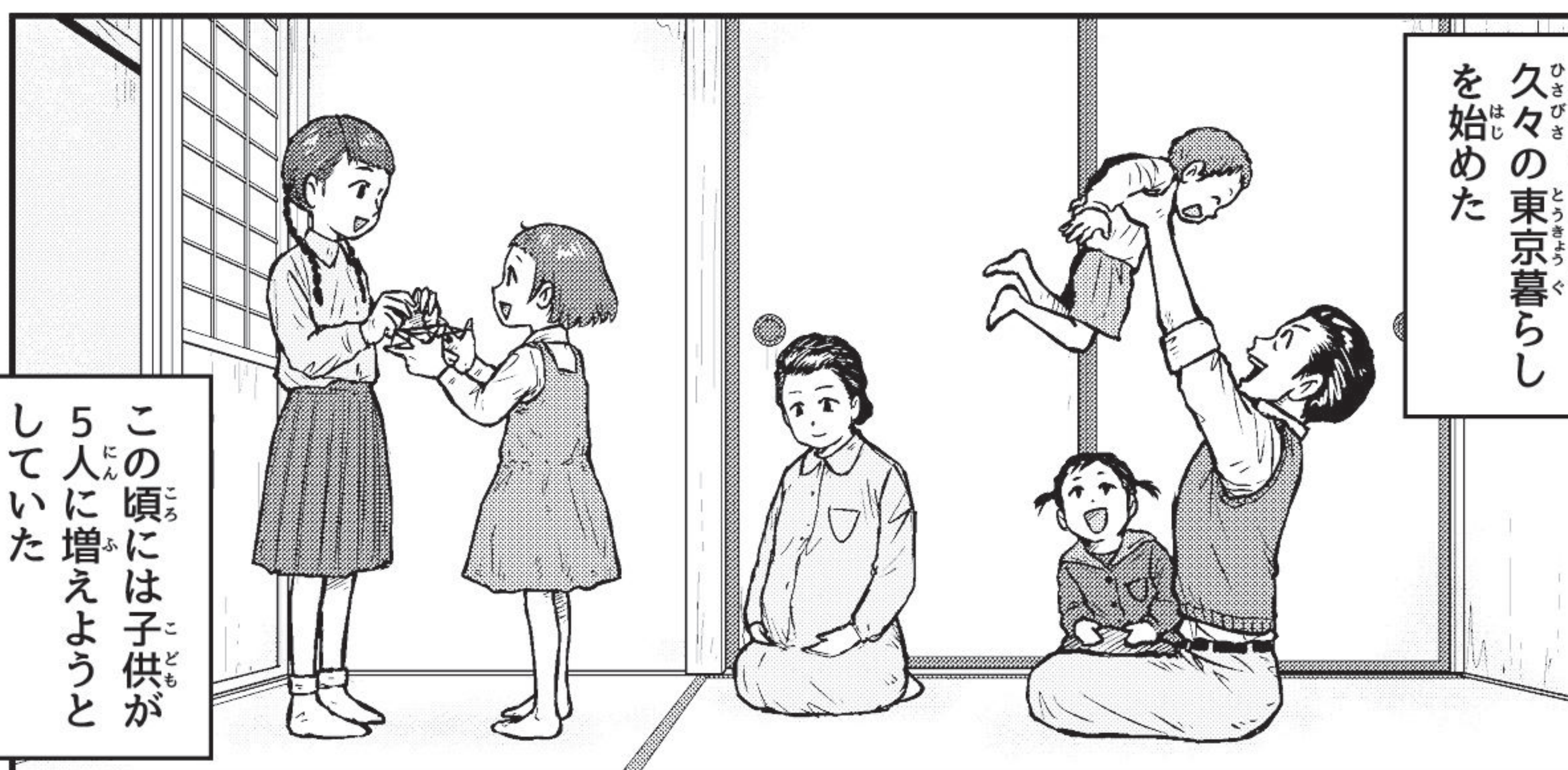
東京の  
マンガ家仲間から  
力を貸して欲しい  
という便りが  
届いた

熊本での  
マンガ家生活も  
落ち着いてきた頃



そして  
家を借り

良輔は  
さっそく上京し  
仲間達と久々の  
再会を果たした



妻子を呼んで  
久々の東京暮らし  
を始めた

この頃には子供が  
5人に増えようと  
していた





東京には  
マンガの仕事が  
山のようにあった

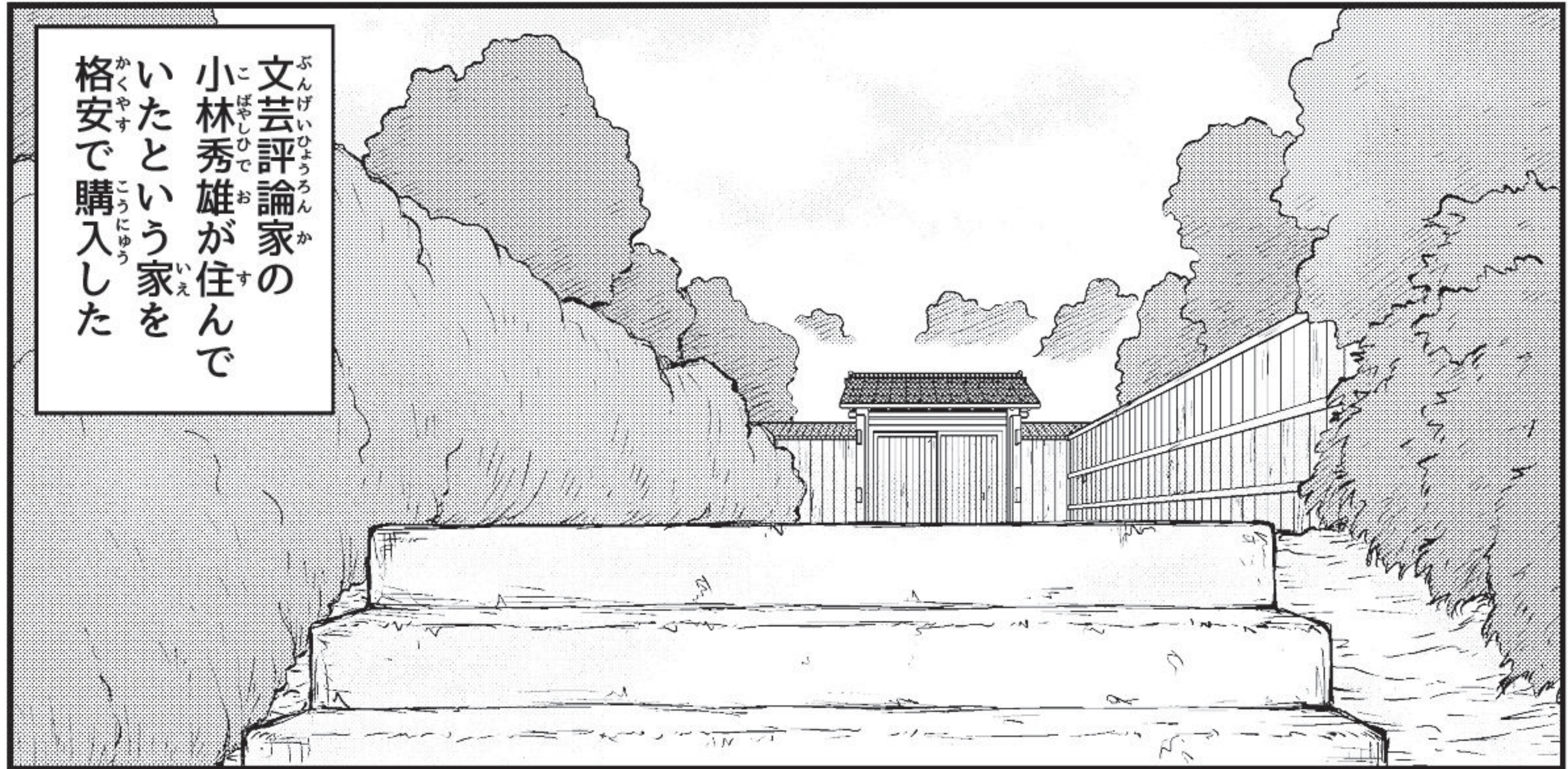
マンガに  
飢えていた良輔は  
子供の、  
ナンセンスもの、  
政治もの、  
なんでも描いた



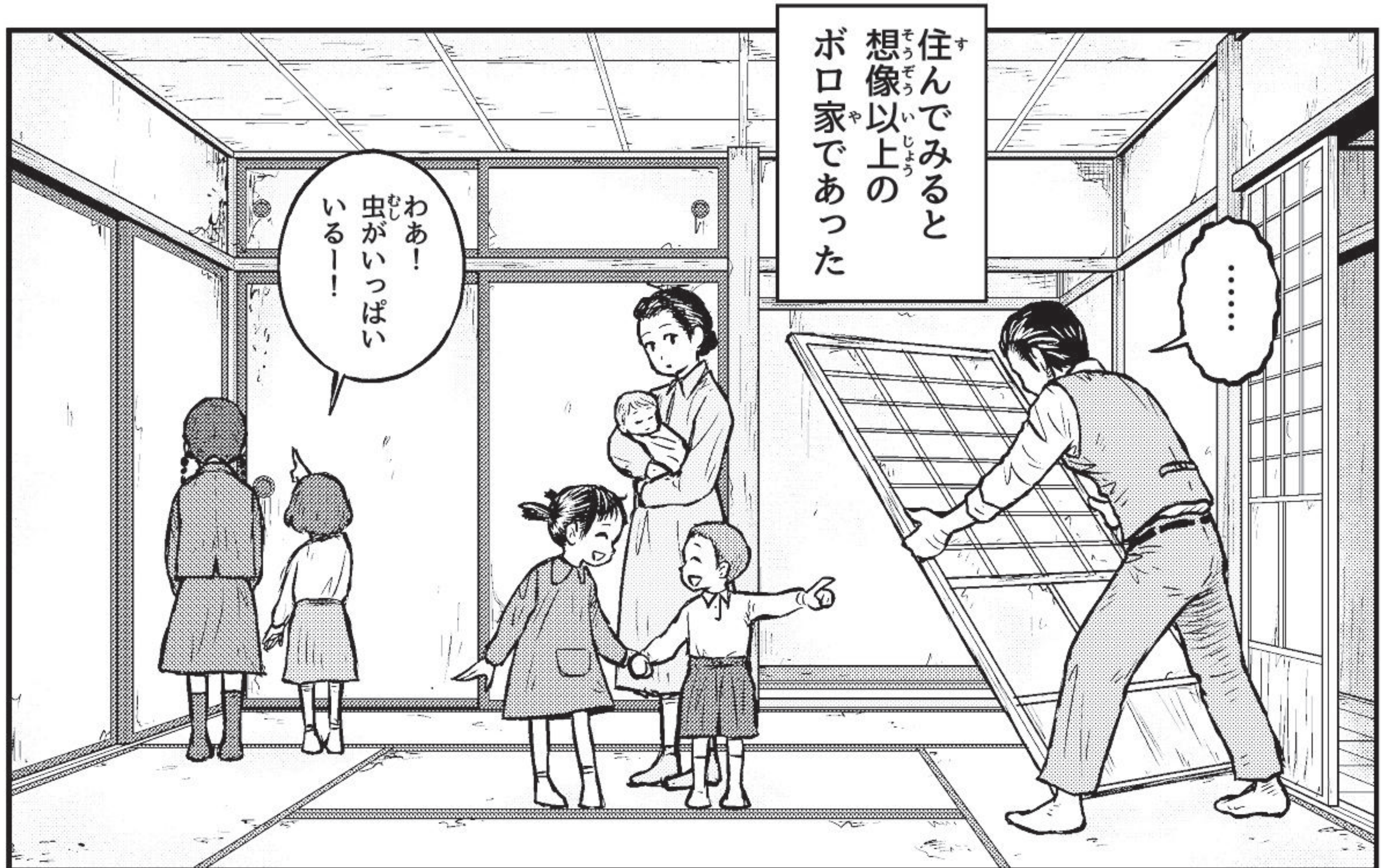
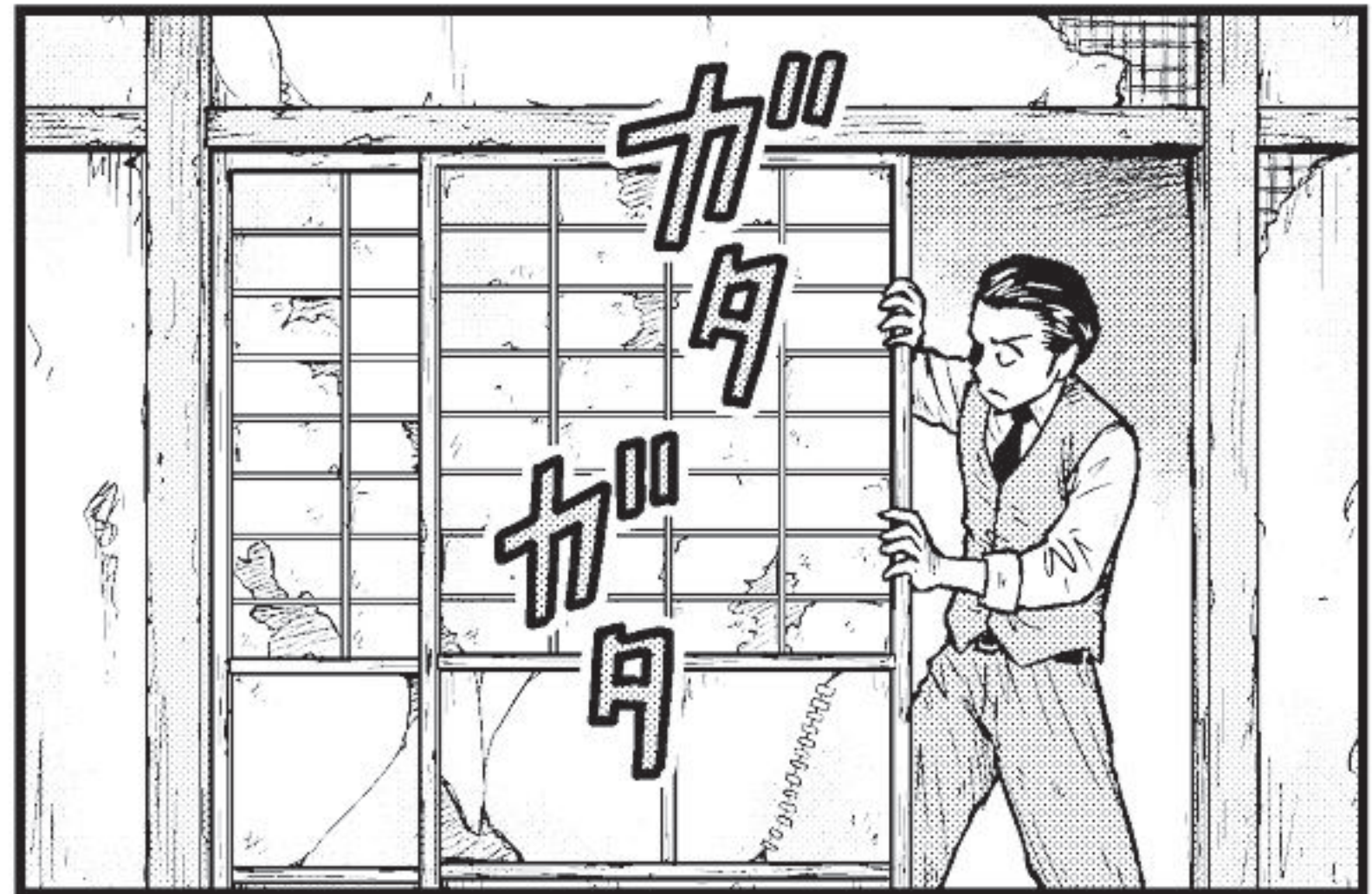
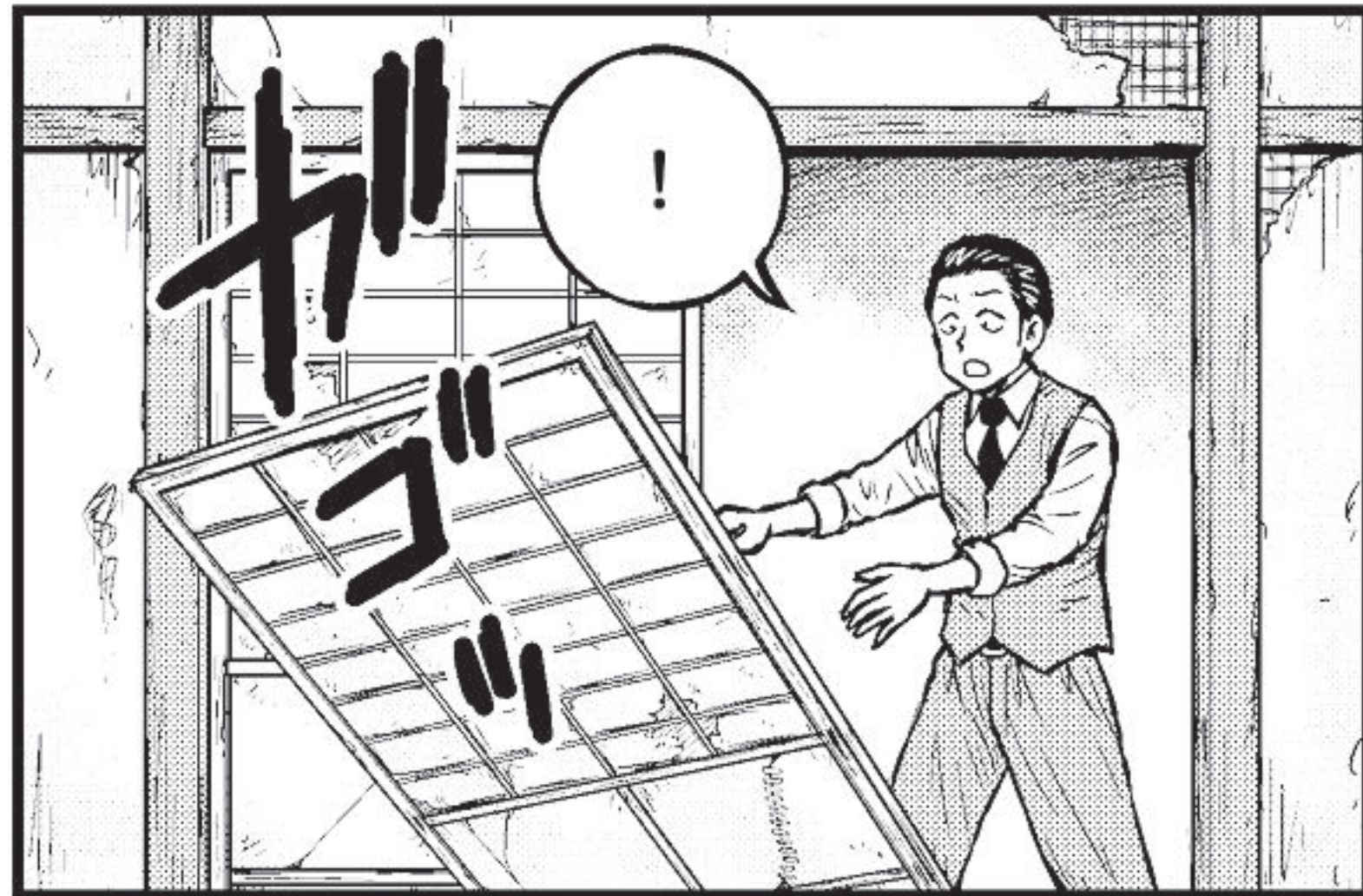
その後  
鎌倉に住んでいた  
横山隆一・泰三兄弟、  
清水崑、秋好馨の  
誘いで鎌倉への  
引っ越しを決意

※横山泰三…マンガ家。 横山隆一の弟。  
※秋好馨…マンガ家。





ぶんげいひやうろんか  
 文芸評論家の  
 こばやしひでお  
 小林秀雄が住んで  
 いたという家を  
 かくやす  
 格安で購入した



住んでみると  
 想像以上の  
 ボロ家であった

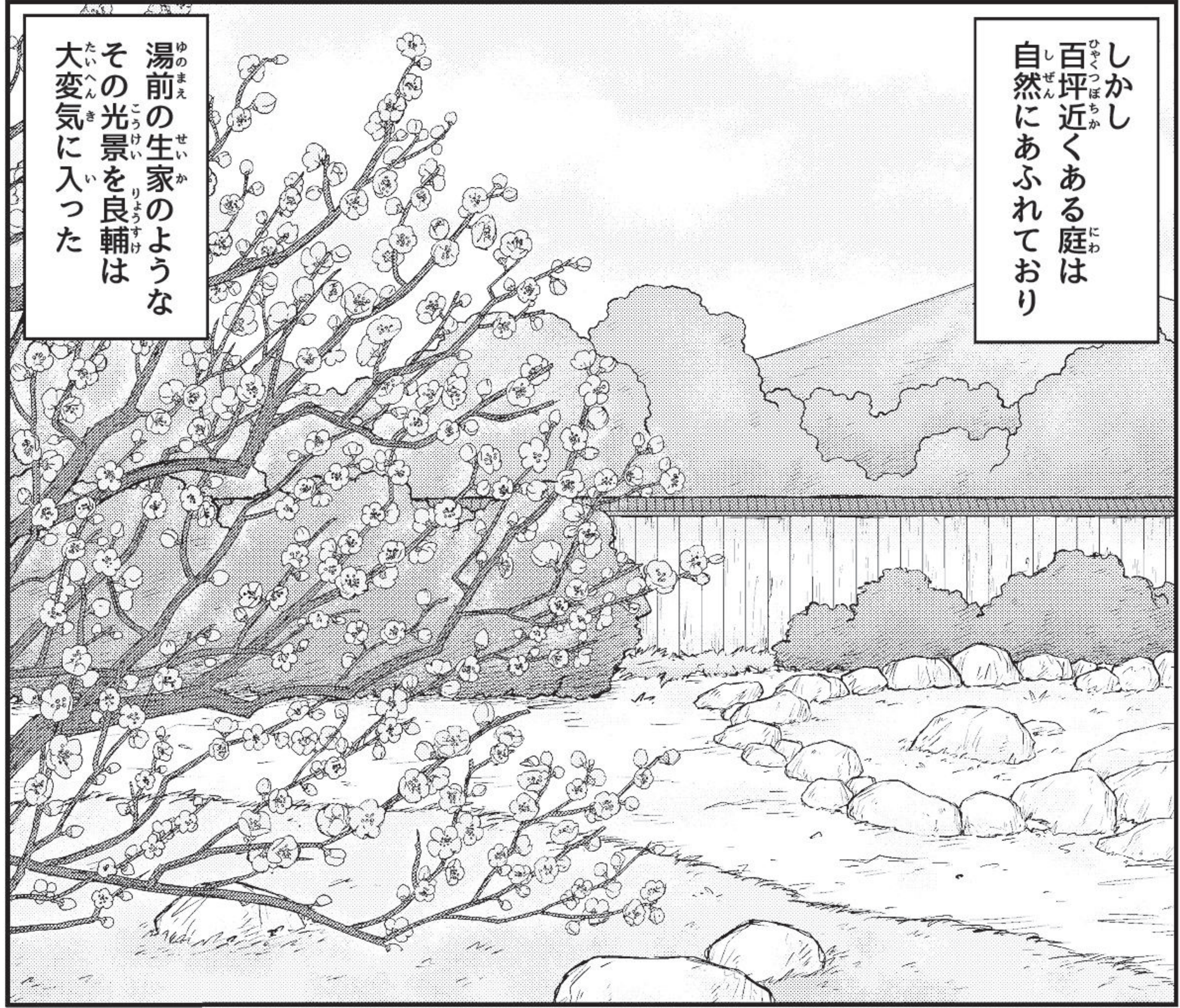
わあ!  
 虫がいっぱい  
 いるー!

...

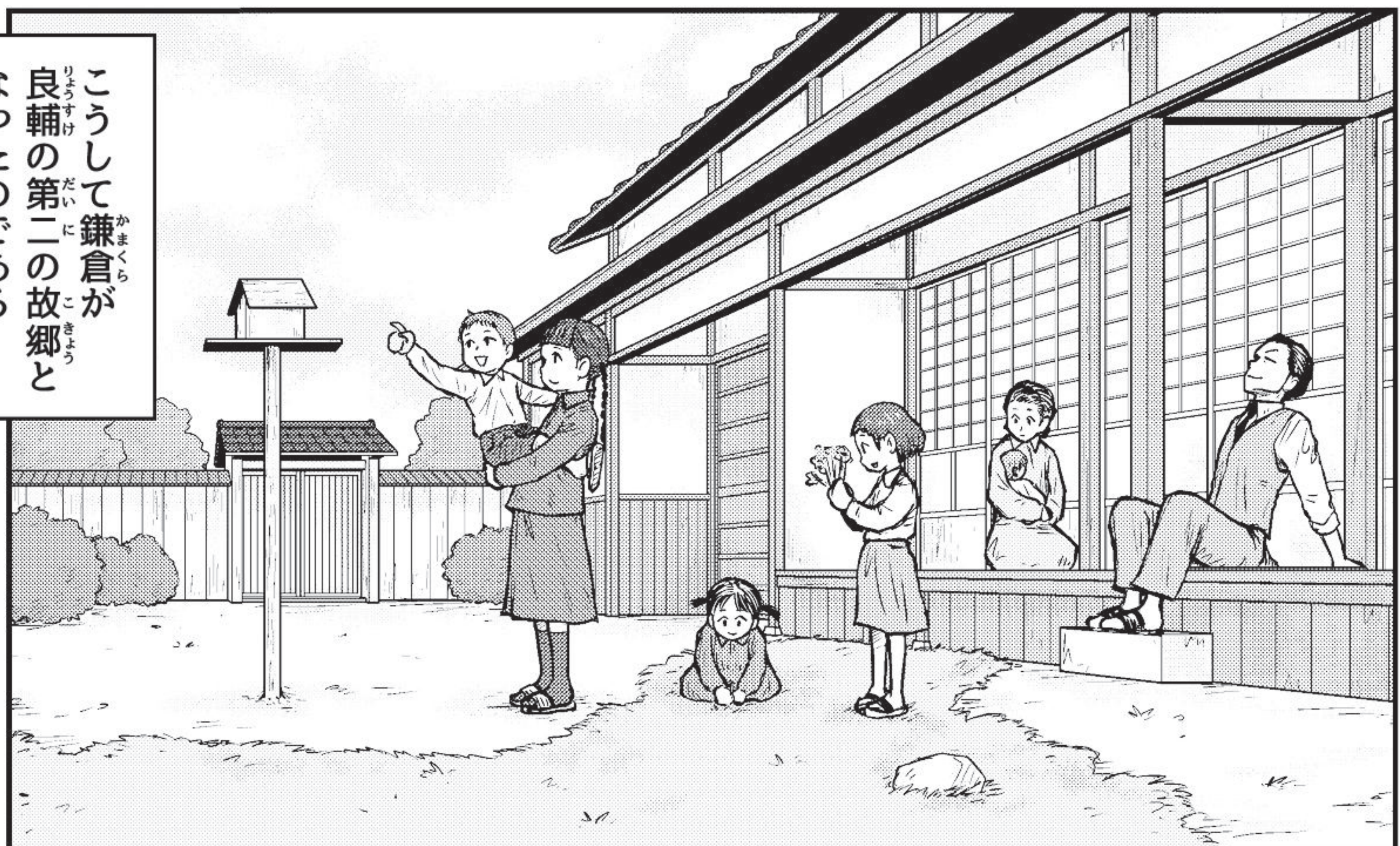


しかし  
百坪近くある庭は  
自然にあふれており

湯前の生家のような  
その光景を良輔は  
大変気に入った



こうして鎌倉が  
良輔の第二の故郷と  
なったのである





## 父の思い出

長女 田淵 亮子

父を語るには、二つの大きな要素があります。ひとつは郷里をこよなく愛する自然児だということ。子供の頃の湯前町の生活や遊びが父の根幹の一つです。鳥を追い、魚をとり虫を捕らえた数々の思い出が父の中で一生いきづいていました。鳥の鳴き声だけで何の鳥かすぐ言いあて、鳥、虫、魚に関しては、知らないことがない程です。母が父と行った旅先のこゝと、庭の繁みを見て、「百舌（もず）はこういう所に巣をつくるんだ」と言っつとつとくと本当に「もず」が飛び出してきて驚いたそうです。

魚とり、特につなぎとりは得意

でした。夜、自分で作った竹かごのわなをかけに行ったり、どこに行っても川をみると「つなぎがいそうだ」と目の色を変えてウズウズしていました。

父が子供の頃、どうしても海が見たくて、家族に何も言わず自転車に乗って鹿児島に向かい、夜になっても帰ってこないで村中総出でさがしまわったそうです。本人は海を見て満足して帰ってきて、もちろんものすごく叱られたそうです。

父のもう一つのバックボーンは戦争体験です。三度も召集令状を受け中国大陸に向かいました。周りを小高い丘にかこまれたくぼ地に追い込まれ一斉射撃を受け、多くの人が亡くなった中、射撃音をききわけながら逃げ回ったそうです。後で腰に下げた水筒に穴があいているのにも気づき、それで命拾いしたと言っていました。

また、戦争に負けて逃げる時、長い長い泥道を歩いて港まで行くのに、くたびれきって馬のしっぽの毛を体にくくりつけてやっと港にたどりついたそうです。道中では食べ物がなく、畑の作物を食べたり、飢え死にしそうになるとベルトの皮までしゃぶったそうです。やっと港について、食べ物を与えられた時、ガツガツたべた人は死んでしまったとも言っていました。九死に一生を得て生き伸びてきた経験によって、戦争を恨み、権力に対する批判精神が磨かれたのかも知れません。社会風刺の政治マンガは、その思いを吐きだす最適の場だったのでしよう。

国会で当時の吉田茂首相を追いかけているときに「オイ、モデル代よこせ」といわれたと笑っていました。吉田首相の顔は大変特徴のある御顔なので、モデルとして、父の好みだったようです。

## 父の事

次女 城川 久代

父は、豊かな熊本の大自然の中で自由自在に自然を楽しんで生きて来た人だと思います。

動物・植物・鳥・魚・虫に生態を本当に良く知っていたと思います。

鎌倉は雄大な熊本の自然とは違っていても、すぐ近くに山やハイキングコースもあったので、私達が子供の頃はよく家族で山歩きに出かけていったものでした。

父はいつも先頭に立って、マイペースにサッサと歩き、鳥の声の間こえると口笛で鳴き声をくり返し、まるで鳥達と会話をしているようでした。私も耳を澄まして鳴き声を聞き分けようとした事を思い出します。

また、一人で崖を降りていっ



て、斜面に生えている山ウドとかワラビを見つけて来たり、私達も木いちごや桑の実を見つけて食べたりして自然の楽しさを体感できた気がします。

鎌倉の海では、自家用釣舟で鹿ちゃんという船頭さんと一緒によく釣りに出かけて大漁で帰宅する事もありました。釣好きが昂じてロシアのアムール川に開高健さん（小説家）と釣旅行にはるばると行った事もあり、ゴルフにもこっぴいて、毎週木曜日は小林秀雄さん（文芸評論家・作家）と出かけていました。

仕事は毎日新聞の夕刊の連載のため毎朝早くから起きて、その日の朝刊ニュースに目を通し時事漫画を描いていました。当時世界では核実験が当たり前のように行われ、色々な事が起こっていたのでそれに対して痛烈な批判をしていました。そのため私達も政治に対しては興味を持って過

ごしていたように思います。

また、政治漫画だけではなく他の雑誌のエッセイや挿絵を描いていましたので、早朝から起きて漫画を仕上げるのは大変に努力していたと思います。この仕事は亡くなる一週間前まで続けていたようでした。

母は昔の女学校の国文科を出ていたので父の原稿の清書を手伝い、その内助の功には父は感謝していたようで晩年はよく一緒に旅行を楽しんでいました。

思い出すと色々な事がありますが、父は自分の興味を持った目の前にある事を全部楽しんでやり切った幸せな人生だったと思います。

自然とのふれあいの楽しさ、大切さを目の前でみせてくれた事が一番の「教え」になるかもしれないと思っています。

## 父からのメッセージ

三女 柳谷 三谷子

自然を愛し、故郷を心の底から誇りに思っていた父は、子供の頃の楽しかった思い出を多く語ってくれました。それと共に、父の生きた時代の中で最もつらい戦争の話も何度となく話してくれました。

自らが体験した戦争の悲惨さを、子供達の時代に、その記憶が風化することがないように、小さな子供にとっては、少々厳しい話もあえてしたのではないかと思っています。

戦争を知らない世代が増えつつある今、また地球規模の自然破壊とそれによる自然災害が人間に返ってくる今だからこそ、「戦争も自然破壊もすべて人間によって引き起こされる」という事

を、これから未来を作っていく子供達一人一人に考えて頂きたいと思います。自分の故郷への愛と、自然をいつくしむ心。そして、何よりも平和を願う心を培ってほしいというメッセージを父の残した仕事の中に感じて頂きたいと思います。



うなぎ釣り

出典：湯前まんが美術館 館蔵品図録 (1)